

週日の説教

金 大烈 神父 2011年8月10日(水)

《私たちの福音的な使命》

私たちがこの世に生れて信仰生活をしながら、いつか約束された国に帰れる。そういうことを考えてみますと、結局この世の中での使命は、中々出来ないことなのですが、「いかに死ぬか」ではないかと思えます。

今日の福音(ヨハネ 12・24—26)でイエス様の例え話として、『一粒の麦は、地に落ちて死ななければ』という表現がありました。これがただ一回死んでどうにか大きな実りを結ぶことが出来れば、それはある意味でやさしいことかも知れません。しかし、人生事態はいつも「死と復活」、「死と復活」の繰り返しではないかと思えます。年が変わるように季節が変わるように、一回私が死んで、そしてその翌年春になると芽を出して、秋になるとまたで死んでしまうけれども、沢山の私の魂の入っている別の麦が沢山実ることになるのでしょうか。その魂をもらった新しい麦も、もう一回死ななくてはなりません。このように「死と復活」が繰り返されて、少しずつ少しずつ、霊的な成長が成し遂げられるのではないかと思えます。ですから私たちが生きることとは死ぬことではないか、上手く死ぬことが出来れば、本当に上手く生きることになるのではないかと思えます。

今まで私がお葬式の時にいつも話すことの一つには、「良く死ぬためには良く生きる方法しかありません。」と申し上げて来ました。又、同じ意味としてやはり「上手く綺麗に死ぬことができれば、上手く生きて来たことになる」という気持ちになりました。

皆様、私たちは毎日何かによって人とぶつかり、自分に対してがっかりしてしまうことが度々あると思えます。しかし、そういう中であつてもただ過ぎてしまうのではなく、“私が福音的使命をしっかり受け止めてよう”という気持ちになったら、次の段階、もっと上の段階に行けるのではないかと思えます。

一番辛い気持ちになるのは、相手によってがっかりすることよりも、自分によってがっかりすることです。自分自身が「私はどうしてこのようにしか出来ない者なのか」という気持ちになることです。その気持ちはある意味で、他人によって作られる痛みよりももっと痛むかも知れません。実際に霊的な成長のために、成熟のためには一番基本的に必要な痛みではないかと思えます。ご自分のために心痛めることを感謝して下さい。もし私たちが霊的な世界にいなかったら自分のために自分を痛めることは殆どないと思えます。

皆様、ご自分に痛みを感じたら、それは大きな恵であることを、「神様がまた新しく恵を下された。」という気持ちで受け止めれば、その痛みがただの痛みではなく、もう一歩前に踏み出す恵になると思えます。

ありがとうございました。